

鳥居龍蔵記念博物館における高等学校との連携の試み — 2014～15年度「博学連携推進モデル事業」について —

長谷川賢二¹

はじめに

本稿は、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館（以下「当館」）が、2014～15年度の間、徳島市立高等学校（以下「市立高校」）歴史研究部との間で取り組んだ「博学連携推進モデル事業」（以下「モデル事業」）について、博物館と学校教育との連携（博学連携）の実践事例として、その経緯と成果・課題について述べるものである⁽¹⁾。

いささか旧聞に属する事例である上、「博学連携」自体は、公立博物館であれば少なからず取り組んでおり、けっして珍しいものではないが、教科教育への博物館の参加が一般的であり、そこに社会教育としての独自のあり方が反映されることはほとんどないように思う。

改めていうまでもなく、社会教育は、定型的なカリキュラムを持たず、個人の自発的な意欲とそれに由来する自主的な学びに基盤を置くものである。したがって、社会教育機関における教育活動は、学校とは明らかに異なる。そのことは、大学生向けの生涯学習概論や博物館教育論の教科書（伊藤俊夫編 2010；黒沢編 2015 など）を概観しても、当然のように記されている。かつて積極的に博物館の社会的存在意義を説いた伊藤寿朗が、博物館を市民の自己学習能力・自己教育力の育成の場であると論じていること（伊藤寿朗 1990,1993）を踏まえると、主体的な学びとその循環による人間の成長を図ることが社会教育機関としての博物館の意義といえるだろう。このようなことを考えると、博学連携においても、社会教育的な、換言すれば主体的な学びに結びつけることができるなら、博物館が関与する意義は大きくなるであろう。

モデル事業は、①当館がテーマの限定された博物館であること、②日常的には博物館利用の少ない世代である高校生を対象とした博学連携であったこと、③それが正規の授業ではなく、課外活動を活用したものであったこと、④博物館や教員が道筋を示しつつも、高校生の主体的な学びの育成に至ったことという諸点において、独自性を持つものとする。とりわけ④は、上述の点から考えるに、特徴的であったと考える。それゆえ、現時点で報告することにも、一定の意義があるといえてよいだろう。

なお、本稿は、当館の側でモデル事業を担当した立場による覚書であり、市立高校側の担当者の見解（生駒 2020）もあわせてご覧いただきたい。また、組織や関係者の所属・職名等はモデル事業実施当時のものを記載している。

1 モデル事業の前提

(1) 当館の特性

当館は、1965年に鳴門市撫養町妙見山に開設された徳島県立鳥居記念博物館を前身として、2010年、徳島市八万町の丘陵地に位置する徳島県文化の森総合公園内に開館した。この公園は1990年、徳島県立図書館・博物館・近代美術館・文書館とともに、二十一世紀館（施設管理や貸会場、文化情報発信等を担う施設）をあわせた5館が、都市公園とともにいっせいにオープンして発足したものである。開園20周年の節目にあたり、6番目の最後発施設として、また博物館法にもとづく登録博物館

¹ 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

として、当館は、博物館・近代美術館・二十一世紀館が入居している、通称「三館棟」内に設置された。

当館の組織や施設は、文化の森の諸施設の中では最小規模である。専任職員は学芸課に教員本籍の2人が配置されているのみで、館長、副館長そして、考古や歴史を担当する学芸員3人、教育普及関係事務担当職員（教員）の計6人が兼務（県立博物館本務）である⁽²⁾。また、専用の施設は常設展示室と収蔵庫しかなく、事務室や作業スペース、企画展示室などは、県立博物館の施設を共用している。

旧館に「鳥居」、現館に「鳥居龍蔵」の名が、それぞれ館名に含まれているように、当館は、徳島県出身で、日本における人類学・考古学・民族学の先覚者として知られ、また、日本列島はもちろんのこと、アジア各地を駆け巡ったフィールドワーカーでもあった鳥居龍蔵（1870 - 1953）の顕彰を図る、テーマ性の強い歴史系博物館である。鳥居と関係資料を主対象としながら、人類学・考古学・民族学史や鳥居にゆかりのある国内外の諸地域に関する歴史・文化等にも触れながら活動している。

徳島県文化の森総合公園文化施設条例には、当館の業務として、「鳥居龍蔵に関する資料（以下「鳥居記念館資料」という。）を収集し、保管し、及び展示すること」「鳥居記念館資料に関する調査研究を行うこと」「鳥居記念館資料に関する講座等の教育普及事業を行うこと」などが挙げられている。これまでに開催してきた展覧会のテーマを大まかに振り返ると、北東アジア、台湾、アイヌ、九州・沖縄、信州、南アメリカ、近畿地方などと、すべて鳥居龍蔵の調査歴にちなんだ設定となっている。教育普及活動についても同様である。

当然といえばそれまでだが、先の条例において、徳島県立博物館が、鳥居龍蔵関係を除く「考古、歴史、民俗、美術工芸、動物、植物及び地学」を対象分野としており、広範囲かつ大まかには学問的な区分で規定されていることに比べると、実に限定的となっている。このような性格は、当館の大きな特色であり、「強み」となっている。『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館年報』既刊号⁽³⁾を通覧すると、ほぼ毎年、海外からの調査来訪者があることが分かるが、これは鳥居の調査歴と関係するとともに、彼の学術的功績が現在も海外から評価されていることに起因しているのである。

一方で、「弱み」も見ておかなければならない。上述のような、鳥居龍蔵を中心とするという対象の限定性から、当館の展示利用者の裾野を広げるのはたいへん難しい。同じフロアにある県立博物館の場合は、その広範な分野設定もあって、中学生～大学生といった若年層の利用が低調であるものの、年齢を超えて親しまれている。当館はこれと同列にはならず、独自の工夫が求められているのである。

その状況を今少し具体的に見ておこう。表は、当館と県立博物館の常設展観覧者のうち、65歳以上の高齢者の状況を比較したものである。ただし、高齢者の利用実績が正確に把握できるのは、高齢者観覧料が完全無料化された2012年9月以降であるため、年度を単位とした比較は2013年度以降とならざるを得ない。モデル事業以前の状況比較にはならないが、一応の傾向は比較可能と考えておく。当館と県立博物館の間には観覧者数の絶対的な差があること、当館のほうが高齢者の占有率が高いこ

表 鳥居龍蔵記念博物館と県立博物館の常設展における高齢者の利用状況

年 度		2013	2014	2015	2016	2017
鳥居龍蔵記念博物館	常設展観覧者総数	14,656	14,312	16,065	17,939	14,187
	65歳以上内数	1,071	1,575	2,111	1,897	1,697
	(占有率)	7.3	11.0	13.1	10.6	12.0
県立博物館	常設展観覧者総数	43,155	37,945	44,426	68,453	44,148
	65歳以上内数	2,368	2,716	3,983	4,896	3,665
	(占有率)	5.5	7.2	9.0	7.2	8.3

注 (1) 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編（2018a:17）、徳島県立博物館編（2018:84）により作成した。

とが特徴といえる。鳥居に関する現今の知名度の低さはもちろん、業績の理解には歴史や地理の知識、さらには人類学史や考古学史理解もある程度は必要であり、そうした点が難解さをもたらしているため、レジャー的な観覧にはなじみにくいことによるものでもあるだろう。

(2) 博学連携の課題と高校への注目

当館は教育機関として、県立博物館に倣いながら博学連携にも意を払ってきた。若い世代には、鳥居龍蔵と当館に対し、とくに関心を持ってもらいたいからである。開館以来取り組んできたのは、遠足の受け入れが中心であり、出前授業が年間1～2件あるほかは、県立博物館が受け入れた職場体験・インターンシップの分担、やはり県立博物館が行っている「教員のための博物館の日」への参加などがある。

遠足の受け入れについては波があり、初めて通年開館した2011年度に43件3,242人あったのが利用者数としてはピークで、受け入れ件数は2013・2014年度に48件あったのがピークである。2015年度以降は10件台にとどまっており、1,000人を超える年度はない。開館から数年は目新しさもあり、県立博物館への遠足とのセットでの観覧が一定数確保できていたが、次第に敬遠されるようになったように思われる（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編 2018）。先に述べた鳥居の知名度の低さなどに起因することは想像に難くない。

これは開館前から予想されたことであり、そのため、小学校低学年の児童には、鳥居が中国・内モンゴルで馬頭琴を収集していることにちなみ、馬頭琴に触れる体験ができるようにするなど、個別対応によって敷居を下げる努力を行ってきたほか、近年は徳島県内で使用されている小学校道徳教材（徳島県教育委員会編 2013）に鳥居が取り上げられていることにちなんでの勧誘を行っているが、地道にPRを続けるしかない。

また、少しでも鳥居に対する認知度を高めたいと考え、開館1周年を迎えた2011年度には、小学校高学年・中学校での使用を想定したテキスト『みんなで学ぼう！ 鳥居龍蔵』（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編 2011）を印刷し、徳島県内の全小中学生及び教員に配布したことがある。鳥居の足跡を詳細に紹介するのではなく、「アジアを駆け抜けた独学の研究者」と要約できるような内容をQ&A形式でまとめたもので、これを活用した教育活動の事例もあった⁽⁴⁾。しかし、毎年配布を続けられるほどの予算はないため、いつしか忘れ去られているようである。このほか、年に1回開催する企画展のチラシを、必ず県内の小学生全員と中学校全クラスに配布することで、児童生徒及び保護者への広報を継続している。

ところで、当館から学校へのアプローチは、とすれば「分かりやすさ」を追求するあまり、鳥居を郷土の偉人として強調するにとどまりがちである。すなわち、小学校中退の学歴⁽⁵⁾でありながら、東京帝国大学助教授として理学部人類学講座主任となった一方で、辞職して家族とともに研究を続けた生涯、さらには海外の各地の踏査による研究活動といった偉業を知ることで、いわば立志伝中の人物としての鳥居について知らせていくのである。当館は鳥居の「顕彰」を旨とすることから、表面的にはこれでよい。事実、小学生ならば「偉人」という枠組みを超えた内容は理解困難なものである。

一方で、鳥居の学術的な業績とは何かということを考えると、どうであろうか。彼の研究は多岐にわたるが、アジアを俯瞰して日本人の起源を追究した点などは、ダイナミックな日本人論・日本文化論として今日でも評価すべきである（佐々木 1992）。だが、称賛だけでよいのではなく、部落差別や帝国日本の対外膨張との関連で「負の部分」を伴うことも指摘されている（工藤 1979, 小熊 1995, モーリス＝鈴木 2000, 坂野 2005, 関口 2011 など多数ある）。そうした「中身」について、次代を担う若者に理解してもらうことが重要な課題なのである。

このように指摘するのは容易だが、評価すべき点と問題点を認識した上で、鳥居の学問の世界とその背景を理解するには、日本及び世界の近代史全般を含めて、人類学史・考古学史についても知識が必要とされるため、おそらくは高校生程度でないと困難と予想できることである。しかし、考えてみれば、県立博物館でも、高校生を意識的にターゲットとした学習活動はほとんどない上、全国的にも高校との博学連携の実践は必ずしも多いとはいえない（長谷川伸 2010）。それだけに、当館が高校

との連携に取り組むのは、意義深いことであると思われた。ここに高校との連携を模索する起点があった。

歴史系博物館における博学連携という、往々にして学校における教科教育に博物館が参加する形で行われる傾向にある。すなわち、学芸員が講師となったり、博物館資料の提示などがなされたりするというもので、博物館はいわば教科の付加的要素となるのである。教科に規定されない場合でも、一定の枠組みをもったプログラムを消化する形がとられるようである（長谷川賢二 2000, 長谷川伸 2010）。鳥居を主題とした連携は、彼の調査研究歴を踏まえると、地理歴史科のうちの世界史・日本史のほか、「総合的な学習の時間」（以下「総合学習」）と関連性を持たせやすいと思われたが、果たして上述のような従来型の博学連携に馴染むかどうかは疑問であった。鳥居に関する学習は、世界史や日本史の通常の教育課程に含まれている内容でなく、応用的・発展的なものとなることは間違いなかった。

もっとも、2013年度入学生から適用されている「高等学校学習指導要領」（文部科学省 2009）を踏まえると、高校教育、とくに世界史や日本史、あるいは総合学習といった正規の授業の一環として、当館と連携しながら鳥居を取り上げることは不可能ではないと期待できる点があった。

一つは、世界史や日本史における「主題学習」である。日本史A・Bを例にして、具体的に見ておくと、次のとおりである。

日本史Aでは、「近代の追究」において「産業と生活、国際情勢と国民、地域社会の変化などについて、具体的な歴史的事象と関連させた適切な主題を設定して追究し表現する活動を通して、歴史的な見方や考え方を育てる」とあったり、「現代からの探究」において「近現代の歴史にかかわる身の回りの社会的事象と関連させた適切な主題を設定させ、資料を活用して探究し、その解決に向けた考えを表現する活動を通して、歴史的な見方や考え方を身に付けさせる」とあったりする。また、日本史Bの「現代の日本と世界」には「歴史の論述」として、「社会と個人、世界の中の日本、地域社会の歴史と生活などについて、適切な主題を設定させ、資料を活用して探究し、考えを論述する活動を通して、歴史的な見方や考え方を身に付けさせる」とある。以上のような「主題学習」が設定されているほか、世界史・日本史の4科目いずれにおいても「地域の文化遺産、博物館や資料館の調査・見学など」を取り入れることが推奨されている点は注目できるものであった。

二つ目は、総合学習においても「横断的・総合的な課題についての学習活動」などが示されているほか、「公民館、図書館、博物館等の社会教育施設」との連携が促されていることであった。

だが、世界史・日本史についていえば、学校では基本的なカリキュラムをまず優先しなければならないことはいまでもなく、主題学習に時間をかけることができないのが実情であった。総合学習についても、まずは学校の意図する方向があつての話であり、また時数があまり多くはない。一方で、博学連携だけに集中すればよいわけでもないという当館の事情も考えると、よほど双方に余裕がなければ検討さえも困難であることは察しがつくところであった。それならば、課外活動を活用すれば実現性が高いと思われたが、湯浅利彦が論じるとおり、徳島県内の高校における歴史系の部活動は概ね壊滅状態である上（湯浅 2015）、肝腎の高校生が興味を持つかどうかということは全くの未知数だった。

2 モデル事業の展開

(1) 市立高校歴史研究部

問題の多い状況ではあったが、鳥居をテーマとして、高校生の学びが可能かどうかという検証をしないことには何も始まらないのも事実であった。そこで、モデル事業として実践を行い、それを踏まえて課題を抽出するため、徳島県内の公立高校数校に協力を要請したが、スムーズにはいかなかった。結果的には、市立高校歴史研究部（顧問：生駒佳也教諭）が、当館の所蔵資料やネットワークなどを活用しながら、鳥居に関する研究に取り組んでくれることになり、2014年度から2年間にわたって

継続した。

同校では、2年生の修学旅行で北海道へ行き、アイヌ民族について学ぶ機会がある。その事前・事後学習で、鳥居による千島アイヌ調査（1899年）や明治・大正時代のアイヌ観についても触れていることから、鳥居について共有される環境があったことも重要である。また、京都大学や徳島大学との連携にも実績があり、独自の学習環境が特徴的である。

ところで、市立高校歴史研究部は、同校創立3年目の1964年に創設された。機関誌『歴史と徳島』（第3号より『市高歴史研究』、現在は休刊）を発刊し、近世史を中心に部落史、都市形成史など、地元徳島の歴史研究を行ってきた実績がある。さらに、各国教科書の歴史記述の比較を行い、アジアの留学生と歴史教育に関して意見交換を行う会を持つほか、韓国国立木浦大学の国際セミナーに参加したことがあった。また、近年では、博物館等の見学もしばしば行っており、県立博物館や当館への訪問の機会も少なくない。

このように半世紀の実績を持ち、徳島県内では数少ない歴史系課外活動がモデル事業の舞台となった。研究者の集合体としての学会・研究会とは異なり、高校の課外活動の場合は、メンバーが入れ替わる上、3年生は大学受験があるため、実質的には1・2年生が担っていくものであるため、長期的な積み上げはむずかしく、単年度である程度まとまった研究ができるよう考える必要があった。当然ながら、部員の確保が保証されているわけではないため、その面でも心許ないところがあったが、始めの第一歩を踏み出す環境が整ったのである。

(2) 2014年度

年度ごとの取り組み内容をまとめておく。まず、初年度であった2014年度についてである。

鳥居について深く学ぶ機会がなかった部員ばかりであったことから、修学旅行の事前・事後学習との関連から、①日本人起源論（アイヌの位置づけを含む）を中心とした鳥居の生涯と研究、②アイヌ民族の歴史・文化の2点について知ることを当面の目標とした。

当館担当者と歴史研究部顧問との間で協議を繰り返しながら、学習機会を設定する一方、校内ではこれを踏まえて部員の活動が行われた。

学習機会として設定したのは、次の4回である。いずれも放課後や日曜日、夏休み、冬休みを利用した。研究者の講義を聞くとともに、他の博物館の利用にもつながるように考慮したものである。

① 5月30日（金）

テーマ 鳥居龍蔵と鳥居龍蔵記念博物館
 内容 ガイダンス、当館及び県立博物館の常設展見学
 会場 当館、県立博物館

② 6月15日（日）

テーマ 鳥居龍蔵とアイヌ民族（1）
 内容 講義① 天羽利夫氏（鳥居龍蔵を語る会代表）「鳥居龍蔵に魅せられて」
 講義② 吉原秀喜氏（北海道平取町職員）「鳥居龍蔵のアイヌ民族・文化論」
 会場 徳島県立文学書道館
 備考 希望者は、同日に開催された「鳥居龍蔵を語る会」例会に参加。

③ 8月26日（火）

テーマ 鳥居龍蔵とアイヌ民族（2）
 内容 講義 関口 寛氏（四国大学准教授）「鳥居龍蔵の人類学研究とアイヌ民族とその周辺」
 会場 四国大学経営情報学部

④ 12月25日（木）

テーマ アイヌ民族について
 内容 講義 齋藤玲子氏（国立民族学博物館助教）「アイヌ民族の歴史と文化」
 見学 国立民族学博物館常設展

会 場 国立民族学博物館

校内では、顧問のアドバイスを受けながら、部員が人類学史について調べたり、鳥居の自叙伝『ある老学徒の手記』（1953年）などの文献を講読したりするなどして、鳥居と人類学について思考を深め、議論を行った。この間、当館からも関連文献や情報を提供し、部員の研究活動をサポートするよう努めたが、研究内容については部活動としての自主性・自律性に委ね、誘導的なことは行わなかった。

活動を通じ、部員たちは一様に、鳥居の業績が日本人・日本文化のルーツを探ったものとして、今も意義深いことを知った。また中には、人類学史において、科学が差別を生み出してきた側面（関口 2011）があることを知り、衝撃を受けるとともに興味を抱いた者、元来関心のあった考古学への思いを強くする者などもおり、自らの学びを内面化していく姿があったことが印象的であった。

一連の研究活動を踏まえ、その成果をまとめる作業が必要であると感じたことから、年度最終の目標として、成果発表会を開催することにした。学び考えたことを対外的に公表することは、非常にハードルの高いことだが、あえてそれに挑戦することでの飛躍を期待したのである。

そこで、2015年2月22日、文化の森ミニシアターにおいて発表会「高校生が見た鳥居龍蔵」を開催した（発表タイトル「私たちが見た鳥居龍蔵」〔徳島市立高等学校歴史研究部 2016a〕）。発表内容で興味深かったのは、正統な学歴を持たず、アジアを駆け巡って行った現地調査をもとにして学説を構築・展開した鳥居の経歴を探る中で、「学ぶこととは何か」ということを考えた点である。そこには、市立高校と京都大学との連携の中で学んだことも反映されており、高校の学習と大学の研究の差異を踏まえながら、鳥居のような「自ら求める勉学」に価値を見出していた。また、学校とは異なる学びの場としての博物館の活用を提言した。博学連携の意義を部員たちがもっともよく理解していたことを教えられた発表ということができるものであった。

(3) 2015年度

前年度の取り組みを深め、鳥居の日本人起源論の現代的意義と課題を考えていくことを目指した。進め方は前年度と同様、当館担当者と歴史研究部顧問との間で協議を重ねて学習機会を設定する一方、校内での研究を自主的に進めてもらった。

また、年度当初から目標を明確にするため、2016年2月21日に開催する開館5周年記念国際講演会「鳥居龍蔵の再発見」（平成27年度文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業「鳥居龍蔵記念博物館パワーアップ事業Ⅱ」）の際に成果発表を行うこととし、それに向けての取り組みという位置づけをした。これは前年度と異なる点であった。当初から文化の森イベントホールを会場とし、200席程度を用意することにしていたので、緊張を強いられるむずかしい課題を与えることになってしまったが、新たな部員を迎えるなどして、粘り強い活動が続けられた。

学習機会として設定したのは、計5回である。前年度よりも実物資料の調査やフィールドワークの機会が増えた。

① 7月14日（火）

テーマ 鳥居龍蔵と現代考古学

内 容 講義 中村 豊氏（徳島大学准教授）「考古学史における鳥居龍蔵の評価」

会 場 徳島大学総合科学部

② 8月27日（木）

テーマ 鳥居龍蔵の日本人起源論と徳島での調査

内 容 講義 湯浅利彦氏（徳島県立小松島高等学校長）「鳥居龍蔵の城山貝塚調査」

調査 徳島市城山貝塚関係資料

会 場 県立博物館講座室

③ 12月28日（月）

テーマ 鳥居龍蔵の城山貝塚調査

内 容 調査 当館所蔵城山貝塚関係資料

フィールドワーク 城山貝塚

会場 徳島県立博物館講座室, 城山貝塚

④ 2月7日(日)

テーマ 日本人起源論の最前線

内容 講義 片山一道氏(京都大学名誉教授)「骨が語る日本人の歴史」
フィールドワーク 北白川遺跡(京都大学構内)

会場 京都大学

⑤ 2月14日(日)

テーマ 鳥居龍蔵の位置づけ

内容 講義 天羽利夫氏(鳥居龍蔵を語る会代表)「再び鳥居龍蔵を語る」

会場 徳島市立高校

校内では、講義や調査、フィールドワークの咀嚼をしながらも、独自の研究に踏み込んでいったのが、当該年度の大きな特色である。各校の高校日本史教科書における日本人の起源に関する記述の比較や鳥居の説との類似点・相違点の検討、最近の人類学の概説との照応などに取り組んだ。また、大正期のベストセラーとなった鳥居の著書であり、彼の日本人起源論の到達点を示す著書『有史以前の日本』(初版1918年、改訂版1925年)をはじめとする、各種の研究書や論文の講読を継続した。当館からは、進捗状況に応じて、文献や関連資料の提供を継続した。

前年度、鳥居とその学問について、包括的な把握を済ませた後であるだけに、次のステップを要求されるため、部員たちは相当苦しい思いをした。考古学史における鳥居の評価の低さを知り、前年度に学んだ高評価との落差に驚くこともあったが、鳥居の日本人起源論、その後の日本人起源論の展開、現在における鳥居の人類学史・考古学史上の位置づけについて研究を深めたのであった。

なお、成果発表(国際講演会)の前日(2月20日)、講師としてスペインから招聘したラファエル・アバ氏とともに、筆者は市立高校を訪問した。アバ氏を囲んで質問攻めにする部員たちの姿に接し、取り組みが生半可なものではなかったことを強く感じたことを付け加えておく。

さて、成果発表は予定どおり、国際講演会「鳥居龍蔵の再発見」の第1部「高校生が見た鳥居龍蔵Ⅱ」として行った(発表タイトル「私たちが見た鳥居龍蔵 Part2」[徳島市立高等学校歴史研究部2016b])。鳥居の日本人起源論について、日本史教科書に見られる残影や学史上の位置づけを含めて検討し、またこれと関連して、鳥居が1922年に調査し、その当時はアイヌの遺跡とされた徳島市城山貝塚調査が、鳥居にとってどのような意味を持っていたのかということ論じた。最後には近代における国民国家の形成と日本人意識、一体感(「われわれ」意識)のリンクを見出して、自分たちの意識を歴史的観点からとらえ直す必要性を説いた。鳥居説が今も一定の意味を持っていることへの評価とともに、それを賛美するのではなく相対化する視点を提示したのである。

内容が盛りだくさんであり、整理のつかないまま発表に至ってしまった感があり、課題が残ることは当然であるが、人類学・考古学史を広くとらえており、高校生による研究や学びという意味ではすぐれたものであったといえる⁶⁾。

一目見れば分かるが、大正時代に刊行された『有史以前の日本』は、現在では大人でも読みづらい。これを部員間で要約と報告を繰り返しながら、読破したのだから、それだけでも驚くべきことである。ほかにも膨大な量の文献を読み込み、博物館資料やフィールドからの見聞も活用しており、情報処理力の高さも感じさせられた。また、例えば「鳥居にとっての城山貝塚調査の位置づけ」をめぐる部員間の意見のぶつかり合いがあるなど、鳥居の思考に分け入りながら、主体的な考察と真摯な議論があったことも特筆すべきであり、それが発表にもストレートに表現されていた。さらに、鳥居の日本人起源論について知ったことから、「日本人」という枠組みにも視野を広げ、現代に生きる自分たちの課題に結びつくことに気づいていることも興味深い。これらは総じて、研究史と格闘し、自ら思考するという人文系の学術研究の基礎的プロセスに重なっている。これを経験したことにより、部員たちの得たものは大きいと確信した。

3 モデル事業の成果と課題、その後の展開

(1) 成果と課題

歴史研究部員たちの活動は、講義や文献から知識を得て考察を行う側面が多かったものの、博物館の展示見学はもとより、博物館資料やその背景としての学問的世界、フィールドなどへ結びつく活動が基盤にあったことから、思考が多様化・立体化したことは疑いない。例えば、鳥居の「調査」という抽象的な言葉を文献で見たからといって何が想起できるだろうか。眼前に、資料やフィールドがあり、多少なりとも「調査」を追体験できるから、思考が生まれるのである。少なくとも部員たちの活動からはそれがよく分かった。その意味で、当館と市立高校歴史研究部の連携においては、学校教育の場（ただし、課外活動）に博物館の特性が融合し得たといえる。

また、発表会をゴールとしたことで目的意識の明確化が見られ、自主的な学びが促進されたことも重要である。学習機会の設定や顧問のアドバイス、当館の支援はあったが、けっして考え方を押しつけたのではなく、部員たちが自ら思考し、自らの言葉でまとめ、発表したことは意義深いものである。

本稿冒頭で述べたように、社会教育には定型的なカリキュラムがなく、自発性・自主性に依存するがゆえに、学校教育とは大きく異なる。その意味で、部員たちが経験したのは社会教育的な学びであったといえる。あるいは、昨今、様々に試みられているアクティブ・ラーニングの一つのあり方といえるのかもしれない。

こうしたことは、時間やカリキュラムに規定される教科教育の枠内では成り立たなかったと思われる。一方で、大学受験を視野に入れて、1年生から塾通いが多いなど、日常的には活動時間の制約が大きいこと、課外活動といえども、自由度はたいして高くない状況であった。したがって、課外活動だからスムーズであったということでもなく、部員の集中力や思考力の賜物であろうし、柔軟に思考を展開し、深める様子は、この世代の若者の持つ知的能力の可能性に期待させられるものでもあった。

以上の成果より、高校生たちが同様の経験をすることで、文化系課外活動や個人的な人文系諸分野の研究への関心を引き出し、歴史研究の土壌や人材を育てる道を開くことができるのではないかと考えるものであった。

一方で、課題もあった。モデル事業は、特定の高校とタイアップしての取り組みであったため、当館としてもそこに特化して支援すればよかった。しかし、同様のことを同時多発的に進行させることは人的・予算的にもむずかしい。また、モデル事業の受け手がなかなか見つからなかったことから明らかのように、どの高校でも鳥居をテーマとする学習・研究が可能な環境にあるとはいえないように思う。それだけに、市立高校歴史研究部との連携という「モデル」が一般化できるものではないものの、挑戦的な姿勢を持つ高校生が潜在している可能性はあり、今後も鳥居への関心を高めるよう当館としても努力する必要があると考えている。

(2) 「鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム」の創設

モデル事業により、高校生の学びの力を強く感じたことから、2015年度末には何らかの形で若い世代の自主的な研究の後押しをする方策について、館内での検討を始めた。このような志向は、独学の人であった鳥居龍蔵の顕彰として、また社会教育機関としての当館としても意義深いものと認識していた。

そこで、2016年度早々に、県立博物館と共同して中学生・高校生を対象とする「鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム」を創設することにした。簡単にいえば、歴史・文化や鳥居に関する自主研究レポートの提出と口頭発表によるコンクールである。当館ならではの特徴として、フィールドワーク（現地での見学や聞き取り、写真撮影等の調査）やテーマに関連する博物館・資料館の利用を条件とした点がある。また、当館や県立博物館としては、研究に取り組む中学生・高校生の相談に対し、レファレンス業務の一環として対応することとし、直接的な支援もできるようにした。

拙速と思えるほど短時日のうちに動き始めたが、それほどまでにモデル事業が残した記憶が鮮烈であり、早く新しい取り組みに着手したいという思いが強かった。また、「鳥居龍蔵」の名を冠したのは、彼に対する認知度を向上させる効果を期待するとともに、彼の少年時代の自主研究活動を範としたいという意図があった。高校生にとっては歴史・文化関係の取り組みを発表したり、評価されたりする場が徳島県内にはほぼなかったことから、今後の個人やグループにおける歴史研究の活性化に寄与できるものという考えもあった（中学生については、従来から県教育委員会などの主催による「社会科学研究選賞」がある）。

モデル事業を踏まえて生まれたフォーラムであるが、2019年度で4回目を終えた。その詳細に立ち入るのは、もはや本稿の課題ではない。概要をまとめた報告書（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編 2017, 2018b, 2019, 2020）を参照願いたい。

なお、モデル事業に携わった市立高校歴史研究部は、2016年度以降も鳥居研究を継続して、新しい展開を模索した。例えば、2017～2018年度には、当館が所蔵する、鳥居の台湾調査に関する調査記録と報告を読み込み、独自に分析・考察を試みている（徳島市立高等学校 2019）。こうした営みの継続こそ期待したいところである⁽⁷⁾。

おわりに

以上、モデル事業の経緯と成果・課題について述べ、とりわけ主体的な学びが展開したことを成果として強調した。あわせて、その後継事業としてのフォーラムについても言及した。

当館の性格からすると、本稿で述べた事例は博学連携としては特殊なものというべきかもしれないが、今後とも真の意味で「博学」の親和的な連携のあり方を模索したいと考えている。

なお、本稿との関連からすれば、2022年度入学生から適用される「高等学校学習指導要領」（文部科学省 2018）において、主体的な学びや思考力、判断力、表現力を重視され、歴史総合、日本史探究、世界史探究といった歴史系科目が設けられることに注目したい。いずれにおいても、従来と同様に、博物館の利用が推奨されているが、こうした新しい歴史教育の行方も注視する必要がある⁽⁸⁾。

注

- (1) すでに湯浅・長谷川・石井（2017）で概要を紹介したことがあるが、紙数の制約が大きかったため、モデル事業の意義について、十分に述べることができなかった。そのため、このたび改めて起稿したものである。
- (2) 2020年4月、教育委員会から知事部局の所管に移り、学芸課が学芸担当に改められた。また、人事異動により、筆者が館長（県立博物館副館長兼務）に就くとともに、学芸担当に再任用職員が配置されたため、専任職員4人の体制となった。副館長は徳島県文化の森振興センター副所長が兼務し、県立博物館からは学芸員等4人が兼務している。
- (3) 2011年度に創刊されており、2020年度の第10号（2019年度事業報告）まで発行されている。本稿執筆時点（2018年12月）では、第8号（2017年度事業報告）までを参照した。
- (4) 北島中学校では2011年度、1年生の国語の時間を活用し、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編（2011）をもとにして、生徒がそれぞれ、鳥居をテーマとする新聞を作成する取り組みが行われた。これについては、指導を担当した箕手明子氏にお教えいただいた。
- (5) 事実関係は単純ではない。長谷川賢二（2017）を参照のこと。
- (6) 佐川正敏氏（東北学院大学）によるコメント、当日の質疑応答を参照（鳥居龍蔵記念博物館編 2016: 49, 118）。
- (7) 市立高校歴史研究部以外には、徳島文理高校郷土研究部が鳥居の調査を体験したり、鳥居が収集した南アメリカの土器の3Dプリンターによる複製品製作に取り組んだりしている。
- (8) 新しい歴史教育への危機感や批判、期待等が混在するのが現状である。『歴史評論』828（2019年）に掲載された特集「歴史教育の「転機」にどう向き合うか」の諸論考は示唆に富む。

引用文献

- 長谷川賢二 2000 「公立博物館の展示と歴史学研究」『歴史評論』598
- 長谷川賢二 2017 「鳥居龍蔵の小学校在学歴に関する資料と検討—履歴書・回顧文・卒業証書—」『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』3
- 長谷川伸 2010 「高校生・大学生の博物館利用に関する実践とその課題」『新潟市歴史博物館研究紀要』6
- 生駒佳也 2020 「博学連携・高大連携を通じた歴史教育の実践例—徳島市立高校における教育活動報告—」『新しい歴史学のために』296（印刷中）
- 伊藤俊夫編 2015 『新訂 生涯学習概論』ぎょうせい
- 伊藤寿朗 1990 「地域博物館の思考」『歴史評論』483
- 伊藤寿朗 1993 『市民のなかの博物館』吉川弘文館
- 工藤雅樹 1979 『研究史 日本人種論』吉川弘文館
- 黒沢浩編 2015 『博物館教育論』講談社
- 文部科学省 2009 『高等学校学習指導要領』文部科学省
- 文部科学省 2018 『高等学校学習指導要領』文部科学省
- モーリス＝鈴木、テッサ 2000 『辺境から眺める：アイヌが経験する近代』みすず書房
- 小熊英二 1995 『単一民族神話の起源：〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社
- 坂野徹 2005 『帝国日本と人類学者：一八八四—一九五二年』勁草書房
- 佐々木高明 1993 「鳥居龍蔵のアジア研究—その足跡をたずねて」徳島県立博物館編『徳島の生んだ先覚者 鳥居龍蔵の見たアジア』徳島県立博物館
- 関口寛 2011 「20世紀初頭におけるアカデミズムと部落問題認識—鳥居龍蔵の日本人種論と被差別部落民調査の検討から—」『社会科学』91
- 徳島県教育委員会編 2013 『小学校道徳学習教材 子どもたちに伝えたい郷土（徳島）の偉人～人生の開拓者たちに学ぶ』徳島県教育委員会
- 徳島県立博物館編 2018 『徳島県立博物館年報』27 徳島県立博物館
- 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編 2011 『みんなで学ぼう！ 鳥居龍蔵』徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
- 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編 2016 『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館開館5周年記念 講演会「鳥居龍蔵の再発見—国内外の視点から—」報告書』鳥居龍蔵記念博物館パワーアップ事業実行委員会
- 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編 2017 『平成28年度 鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム 報告書』徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
- 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編 2018a 『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館年報』8 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
- 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編 2018b 『平成29年度 鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム 報告書』徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
- 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編 2019 『平成30年度 鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム 報告書』徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
- 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編 2020 『令和元年度 鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム 報告書』徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
- 徳島市立高等学校（文責 生駒佳也） 2019 「変化する社会の中で、心豊かにたくましく生き抜く日本人の育成」『徳島教育』1187
- 徳島市立高等学校歴史研究部 2016a 「[参考 昨年度（2015.2.22）の発表スライド（抄録）] 私たちが見た鳥居龍蔵」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館開館5周年記念 講演会「鳥居龍蔵の再発見—国内外の視点から—」講演要旨集』鳥居龍蔵記念博物館パワーアップ事業実行委員会
- 徳島市立高等学校歴史研究部 2016b 「私たちが見た鳥居龍蔵 Part2」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館開館5周年記念 講演会「鳥居龍蔵の再発見—国内外の視点から—」報告書』鳥居龍蔵記念博物館パワーアップ事業実行委員会
- 湯浅利彦 2015 「郷土文化教育の素描（上）—地歴学会アンケートをもとにして—」『高校地歴』51
- 湯浅利彦・長谷川賢二・石井伸夫 2017 「徳島県立鳥居龍蔵記念博物館における教育活動の試み—小さな博物館の大きな夢—」『博物館研究』52 - 5

（2018年12月20日脱稿，2020年7月19日 初校に際し加除修正）